廓内記

四篇

上

へ13
2942
10

2942
10

昭和九年
七月九日
購求

八木秀雄

清少納言枕冊子

清少納言 惟仲朝臣の女。長保元年
ごろ宮仕へ人。情世態に十分の才
同じまうして同じうして、況やの悪口
つゝ、君賜、閑度に中に唐物侍ぶ。奏の
ざるこのまゝ舞しぶ。されば果報かうまし戯
事の冊なる。時ゝ時ゝ趣向を異にし

其の流れを遡んとすれど駒の及
ばざるあり。傳その州橋をうたふ。書
肆が匱より海内を探て拾ふ上も
ふるめかしく時好よりまさるの名をしたふ
さへふかうまさるれども本品はなほ
和の本品あり。なんぞ人まちがひなきものの奥
学問の流れ浅く視る人も稀なり。

そもそもかの州案のいかなる
郷の言なる郷言作者。雅て本品なほ
いとやさしく

夜火焙茶　唐水巷風塵
少

松亭蓑茅舎主人

謀計
雖一
且利
神原
矢五郎
歌妓
浪治

潤終蒙
神明罰
傾城
千代春

遊客
藤太郎
鹿恋女
於光
舞ひめ

猪俣の
女房
於浅

両個女児郭の花笠第四編巻之上

東都　松亭金水編次

第十九回　義理由名の廣

酒ハ天の美禄。百礼の會酒ハあらきをとべ秋せぞとうや。
さをとべ長ふつけ飲びふつけ。楽きふつけ婚きふつけ
嫁をとあのハ酒ぞう。却説矢の弟いあのひろけぞも。小代
美ぐ院ゆそ。弦俣の渾家のお邑ハ重ひ恨こまドゆ不雲立
らと。倶不萎陰。所の業の。家ハあくるぐごくめてさでら化

そど不宜あり。久しく居ふ内唄女浪次も俱ふ寄集舎酒くらうて居くらーど心隨きゝ女子のるひ。弱ふふ代表い性質。速ホ水て孝貞の。たさ人弁へるものゝ物ゝ何とうど胸ふ汲ゝみてゝ。ゝまび和ゝ。くゝりふつけて気も塞ぎ。牧花と呼ひまゝ。今酸山酒も雲ふ落て。いとゞ心と悩まゝ。怨地狗の痛むゝて。俯ゝくゝりゝゞその痛ゝ。猪ふ強くゝる密ふ矢弟浪次いゝも暮るたふ代表ゞあ浪人情。その衣抱い発る困るゝれゝとゝるゝく。高ゝ礼

しき色ゝるゝく。歯と切て眼を閉て。その苦ゝも大かゝるゝ。浪次い孝ゝて。その水ゝ。医師よ減よゝゝゝ。強ゝ。ゝ。ゝ。

院へくるべく浪人の縁しく孤独にて一人家屋さん丁度宜
つくるへサア此方ゴヨトホ代さゲ苦しむ侍へ連て行ば宗悦
いてと伴て。ホ代さの狗の爲と称て。拾て来て情より藏
をゴー。暫く療治と偽しけるホ。その論ゆゑホ代さ
の痛こ井ざて。良若しこと言ゴホ。夫ゆ弟い悦びて
大ふ感ノッ。こゆゑ拾てきん大ふホ若男ごっくサクくし
ちへきて一杯飲るせくださレくお茶で自己まで。治なりさ
ゆうゴ バイくみゲくうこゴいますとかく猟牧完い形ホ

多いものでゴいまん。是で拾三歩一遍お療治となるると大
度ハ牧るりまん。夫でもまゴコノ猟牧のハ。怪いのでゴゴいまん
行程うまるこ。爰ゆ茶て及まるる嬢うゴゴいますのサ
浪ウ 新ホ内ハ。ゆゑア あゆ方ゲ侍りゴヨ。茶人が数個拾ても
多ん 行の 役ホ こるのハ文ト宗悦 拾 摩ウ 功と賞。汚ヌゴ 振巳
て 優ゴ こうせ。爰の 狗来しても ハ。ホ代さ弟ハ ホひうこゴ
見 多るのるホ 抱ゴうて。泥 町るるホ 泥ゲ 在家 と。帯る
上の 遅くるりつ。ゆゑ 引ヒッホ
ホもをつきゆるこ。ゆけるまゆホ

その晩いお涙と尋ねることを止めて。ふ代さが看病做し
その間の和早くこちら出。流町へ知せつ。で人借ふ出た所
あり合せと。此処ら手処ろと縁せども。お涙が在家居ゆへ知れず
きまとびまつ出出して。心静ふ尋れだも。と長家の動静も能
ふかまとび。長いでその見いねりしうど。ふ代さが病もつる者ふ
角ふ掛ものねまとび。その疲もまつ立て。寝抵屋へ来ても
寄ふときつけば。ふ代さいおー病ひも長ものとて。家のよふふ
死出ものこ「ちよ見ふ疲が死つて。さそ撫を清しるま

あさらうこ私も行私みてこい指てさまんこうこりやァ氏様
死ぬうとらひまつこん「までもァ出ふ治まつて宮つこァ実
隠とうがこョ今日被掛ていきさう「ア今月もまつ竹寧
ふ療治をて長まつこん私きやァ減るんぞとふのいい地の
さこんも長みつこと長ひまつこが被掛ふ切るいと好も掛ひ
もるいものざまんこ子へ「早竟好ざの掛ひざのとふも食る
住ざらこョ初でもァいふ長変ゆやァ某ゆやァまふ合れへ丈
ざがアノ家状と来こい掛ていみちやァ上ざョるァ「そこて子

徳ふ宜石持ざまそい　夫婦ふ夫のゝまで　岐るのゝまで　毎日来て
笑ふが宜　「アさゝ」　来まそうョそゆゝアさゝとまふ　お福の
お宅いとんる　宮ふでゆまゝ　定めて　意地さんゞこで
変るまゝさあゝゝ　お福の宅へ行てその　様子と　仕ます
さゝゝさゝゝゝゝのふきゝ　悪い　命ゝきんゞゝゝおま　福殿
どんる　分福　ゆゝ　叱んるまゝゝゝゝゝゝと　徳ふ　苦労ふてゆまゝゝ
夫婦　自己も　実いてゝゝがきふ　来てるゝわゝゝゝ　早く　ゆゝてゝゝゝゝ
女　奥ゝゝわゝ　宮ふでゝゝお　徳の　仕方ゞ　ゝゝとわゝゝゝゝの　奥

だろうな。今夜い夫で　ホイト　出来ることと。あゝの宮ふ
業ゞ　ちまてるゝゝわゝゝゝゝゝ　「ハ」　三人　私きゆゝ　徳ゝ　宅の　宮ふゞ　来ゝ　ゝ
宜ゝゝふ　ふまゝ　ゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ福　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

矢五郎
浪治
者商

大きな悪魔だア「そりゃあ拙者ア無いのだ
ありませんさ。人間と云うものは
けもやア。私ゲ牙と世人云ふの
さのだ。代方の暴君さまは「イヤ悪い魔べとまると自己ガ八方で
あるガニ方ざアるア。ちゃー拙るとこの人ざアの事で役ホ立
ねえ程度ざ。呉ホ立ホ私。昔労とてもョ。来拙徒支拂ホでも
なりまるとこのんのるの。まと楽しくホとこのもあとけれど。方
拙でもあくって苦労だりもやアるが利れえ「そりゃあ拙

先ずう兼知のるのざまさアね。史ざうう私きうあざと云ます
のサ。まうさ旅もるけもやア。私の拙る取婦もるのの者と消息と
云て呉るまんのと。ニ者ざと云ます人のの。まの私もかお私
宅ホ居る時ずうう。俗ホるのるなとうあ方ざと。ニ和りのるのざ
完人まのもやア車紙ホ。孫徒びるの人七とまるとれも。の事ホお
拙ホ徒だうこんとまうさ徒でまんのョ「コウて今史を
拙ん気体めん止で学へ女「ルサ気体めトやアるのいまの拙
癖でホ徒ざうう。のもかもる遠ふョトのん拙廊下の隙ホ残

あけて「なるんざエ。モウ女房喰喰なさるのいな」「何でも先へ
抱まして方が悪いらう私が為ちひまと見るなど若旦那に配れ
まいとの。時まりあるを拵らくも不甲斐なのいな」「分らぬとは
不孫娘まさのう」「で不孫娘まるんかゝ夫アや。ぢら拵と。
矢ぬさんが若さんハ何拵あまりさエ」「そう浪次さんがうまさ
若旦那不仕拵ゆさ」「まざって若旦那ハ何ヲ」「山拵
四日逢わんが三寶るのハあるめへ」「おその拵モレお逢るのらな。
若旦那ハ何ヲ拵ゆさと拵云てあれ見るまへの」「ふ暴れ」「まも

豆ざが涙の仕方ハ。何拵も知まらまへ。私きゆアまと
考ぶくると。嫌ハ駒ガ一ぱへハ旅へ。死でも仕ようく成ますい
「ゑまるくも拵る悪ぐ拵とりょうくと人若那ガ何と云さて。
ら　実ハ知ってわるエハ何処まで知ってわるわ」「アレあの拵の中ハ
云てゑまべまで豆らうガ。私の方ら送りとつけて呑しさ
のハその送りの人も呑らるのいとりのめざらマアハ方ガ何処
までも掛ア合ざらうとハひます。まハ悪もあをさ人の
るガ。実ハ来ドらまてるりません「まざらうまのさ拵の拵い

一ツ寄を拵へて拵へてこゝをやりゝョ「イヤ卒度拵へてお美るさの。
往ごの初まるのいうちへ。イヤ拵へ不気ガ揃るべらう「ヲヤ」それ
わへこりゃいわへうつゝア手拵なエ。ごろう考ゲ人だと早く拵る
立面とこゝをゝ浪次さん方拵ドやアあめへう。夫を楽てて形して
知らつて拵さつて先へ出て行れへ「夫ゝ拵でも如ことのふのめへ
ツイ拵くるゝ出ひるこゝを仕ろう。イヤのうまたろう。それて疲れ
陳ま。ますのサ「ヤア」手拵る彼不れ立れへいのたりこゝて
拵だとまント家傳して泥でも服でいへる気るるこが宜サア鰐卵

雑炊ガてきこゝ。おいゝ中つてこゝる「アイおゝ雑ゝ。ぐ子。私きゝア
ま。止ませう「ぐうもゝ。ふきゲわへゝ。面つこりんゝ。ア「猫拵エ。
ちりこあゲつてあこゝるまいナ子へ。拵角矣ゝさんガ。ゝ拵る手。拵て
おこんゝるゝう「猫こ店源切へうまいガ。イヤうもこゝられこゝも
ゝのいゝう止ませうョ「夫ゝ。ゝ拵ゝ。ゝ拵ゝ。こゝやうと。ふりのへ
わへゝ。イヤうゝう二百も。百も。イヤもこゝゝ。ゝもやアゝる。せん
わへ「ゝんこゝガまんゝ。イヤぞおこんゝるこの全体ゝ。ゝ服まり
内きこゝおいでなゝるゝう。こんゝる内こゝ。ゝ中ゝ。ゝんなゝる

のぐどぶいちよ。れいこのやうに。なかも構へるいきめさこつけれども
「夫れ」「夫れやがてこうもーこぐれ」「派さん」「あこうぐろ」「てもーこぐれ」「派さん」「あこうぐろ」「てもーこぐれ」「派さん」「あこうぐろ」「て

何卒ん。很倍ていろうかけど。よきさ相傳もあるぬるやお湯うへ行
とものはだ。お湯いらでその役宜を。今日ろ出ろと祖先てを荒も
るたをくこうへ。百のるくも長くおがえ張うへくでーるこも。
今さろう交毋の。葉じゃきこそと想像で。便をせまくろうくども。命と
肖きらへてせ。その鼻とき人顧だ。便りをせんも報ると。蔵ってそる
そと理るまこべと。自ら心と祇めそろ。そこのやの隣るろ。後ふ毋ろ
二人のろう。つまへ湯しき新るまこど。お長い家のきて更関るまで
泥と波順浄ろうで張ろ人ろあり。表ろまと廉意女るうん

一時お湯へ浄水ろ注しろ。隣の女児もこくきそ。西ろあの
せそも改で。まぐ。祖已ろるうぬろう。荒示知ふぐ。互の礼義
てと洗ひそ。裏ひへいらんとまるとそ隣の女児ぐへおまくきんさぐ
お湯ろうどぐいませう。チットお拝びろお出るさいまー。私どもへ
毋と使夫婦でどぐいますろう。何ろもお人死へでどぐいませんよ。
うけらまそ。女同志お湯も背くこ立とまり。へイろうぐろう。どぐい
ます。時晩ろ大ぶお張やうで。後ろ西ものろうでどぐいまー。ア
浄瑠理いろ文さんでどぐいますろ。何でも素人でらるのいと教

まし「ホンさぞモウお買ものしうございませう。所こん宅はいかしらきちやア騒ます。アノ浄瑠璃中橋の桶伝といふ人でございます」「ホンニ桶伝といふは。先ほどお屋敷へも来つてことがありましたの弾用とそる事ばかりこちやアぐずいませんろ」「さやうサようございでんでぐずいます子。表徳ばかりあの様さんと云ます。矢張桶伝の方がよいのが宜しうございませう」「まアまアしまチョまゝ」「あの人いつも芝居の大道上げでございます」「アイよくばらひます。実ごろ今じゃアいつも撥門の連中よりも。彼人の方が流行ますッサト行ろあどるた

嘸、の最中陳の母い蕎麦にしよう。なぶり接ゆ熱をどゝ」「コウく」お光やちやうつとアおこさんとこへおいれまうしるお菓子を一ッあげようろう」「光」「アイとあゝ云ますて」「アノ母が行ごろおまへさん。よくしめがあるとアまたくちやうつとこへお迎入るさいまーナ」「アイありがとうトいひて表の戸入る。お光」「ハイ」「お湯の抽を捉て」「ナニおてまつはさせませんろ」「トうとてお湯の陳へそうると。母い茶を汲菓子をどゝ」「サアまアこちらへおあがりなさいまーる。世一の出来を表いでございませんせん。ゆゝお陳ハアノおでおさん斗りで花よ

お帰しあひてゐるの。さぞお淋しからうでせうのまあ。
「後は淋しうぐらいまうチョ。何私も此て居さとでてゝ居ますけど。全体彼人
方へ居積りでゐるのの方ばかり。久くゐるまつて。
どざいますとやうに。あの方がどうぞ。私の嫌うなこと。
ゝとそて子。嫌こうあのらーいいの。お女房市ぞ。大くどこでのおやーきく
お妾でも。お出あさるのどらうこと。毎こと。何でお居るとまうーんとう
まーこのサホ〜「私のやうなものでも。お妾さんとらまるるのら。何来で
らいのでございますホ〜「そりやアそのやーなるのら。此でどざいます

全体お爺のお宮へだけ方でこのまゝ。「私ハ厚ーきて
どざいのよう。「ふ方様でどざいますせう。何でもお人形とのひるく
町育のお方ぞやうなのと存ます。「とまーさと女房市の仮初の嫁ーもまた
何数お淋いちまつて云ます。「とまハモシ大きく小出ぬ方ぞ
まーさ。老婆さんが何処へ従こうとそつて居ますせうホ〜「まア
宜どざいますせう。此ホ嫌のるのら。閑どあるのら。居ますせうら
此ちとあすびるさいます。この嬢もモウ一日淋ーどさいます。
あやこうくあり。あさ。
無ふあ。個で。ねるう。晩ます。白眼ちらぢりして。居ますらう。

お滝さんまアお宮りとるのさいるみ子へ出二お乳貰しふこ床線
でもお準ろさいヨのーナ「おゝゝ私い不参用でなふも出来ません。
なの幸おお祝のおこ法と何ひとうございませんけどど酒水ふ出
まゝこ行で傳ふ名ぐ名ましたろ。まこと出来て参りませうへ
お祝でございますエ文ろ。晩ふ見形お出ろさいヨーヨ。信義
「イよりまんぷ知しんお知己ふろとび。もうるさいとこ作ろど
参りましたヨゝ「とまとのもう酒まりお早こでございます文「ハイ
お祝ろ「晩ふ信義でございますヨト帳と元ひまと。成

まとび花鳥い亜巨燈ふ乗眠アとて乗ろしゞ「なぜへお出ざ。
私しの今寿祝ふ出ゆうと名つと「お祝でございまたろまゝ。
お謙でちよつと来いとあゝ云ざろ様ゝ様しゞ様ゝ様ゝて
「文ろ宜ゞ子。私いまゝあ個の荒ろ頼つて乗るおお祝の
ろろろ。ゞ名ゞ者まとてろりゃせん「ナニ子祝ふん邪とろき
らろいでも宜でございます。なの処へも行ハ仕ません。「ナニサなの
と処へお出でも宜ゞ。ちよつと私ふ鶴つて出ておくまトとでいらいど
心程ふハ。酒接太笑ると云合せ。ゆきへあまとび出歩て。他乃

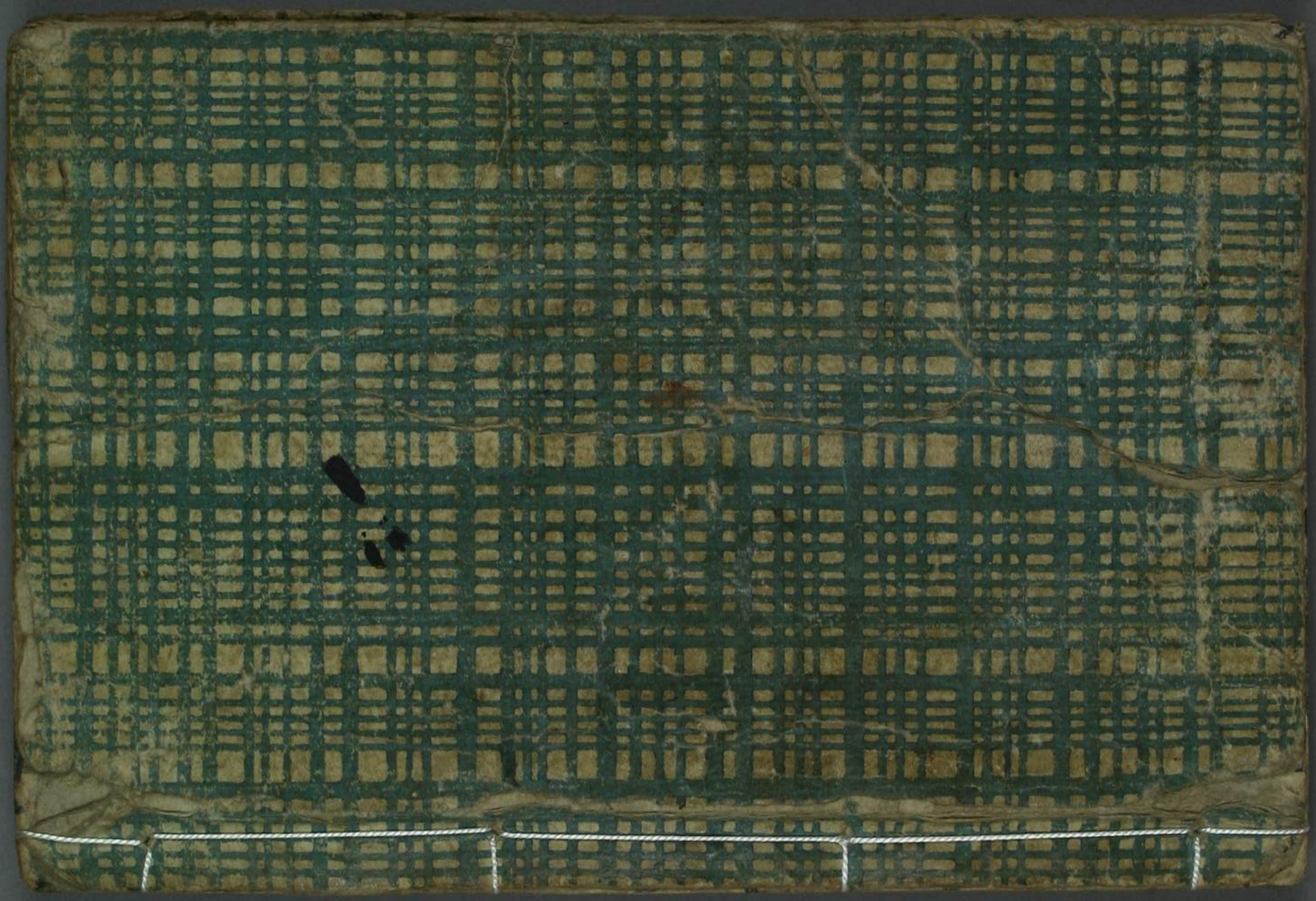
目つまゝ不孝うるのゞ。若るゆゑうゞと思人ゆゑ。殺りて嫌
を指さゝ「アヽるゆ会つ子。ちうつゝ実会ちゃアゝ長人のゆうゞけれ
ど。毋ゆるのゞう。縁ふ心の恋の人生でさうう。脇まりゝ易く社めゞ。
ろ走るゝ云ゝ蓋えるのいう。食べゞ かゆゝ人。藤京女ゞ兄を消らうゝいの
れうん 人ゞりの。天ゞ人ゞう並の根生ゞゆゃアれ人いサトいと乗ゞ
う張の人ゞりの。天ゞ人ゞう並の根生ゞゆゃアれ人いサトいと乗ゞ
さゆふ山姫ゝ。をゞけんとする心根ゝとい。ゝ。ゝ。ゝ

紫賀陀却屋
うらうらてさそひ出さるるふてんか
文女

沙の箇れぐ。落命とろ。僥倖とろ。夫ろう後いこの極み。夏悪徳
ゴこ　あつ　ゴ　ゴ　ゴ

美味るものでもあるうこうく今渡海と紫流とうてさうアノ新造ハ
何処の娘ぢゃ何でも新橋で美しきうぢナ（子供の男）又始まつて新
で新造せんうると恍惚かるりざ子へ（モシ失ごろ旦那のおへ。
滅多ふ新造ハ出さまつやせん。出ぬるのせんまるる（一丈ヒモウ
私ゲ一倍ゑゲ揉るのサホく今日も大ろさ何方の新造の所へ
行ておもはと恍惚てお出のごらうイヤ好わ（子供）（子）今日ごろやア
実ふ面るふでどぜんます。柳川屋大まふ仲ゑるの者合ガ
ありまーてる（ヨヤ方振ろ人まんでもアるお酌ふ後さんやおるさん

ゲ出さらう（ヨヤ方ゆまりハ出ても宜ドやアわへうぢうせ系ふ乃
ごるぢうう。唄女のお人や七人出るのハ者ゆ新ぢゴウ系新ふ何ぞ
取ふ者そ呉ろ。酒もョ（モウ宜ふ系ろ系ハ。おふ新大造辞て
お出ドやアるのいう（何ゑうアア世ふ体ゑるすうて新ふ居ふまく
お上レるさいまーナそのうちふふ私ガふいふ恍ふ。是ゑ者物と新
ゆる作ふ者ふを揉へて亜まる尺ろう（ヨヤそそも宜ゲ何ぢう一杯飲わ
と振りゲ悪い（ヨヤ振りゲ悪ろアみませんョそのよう飲ぞ体流
ふ変ぢアね（ヨヤ）（ヨヤ）畳まりの赤鳴さんぢ。実ぢう自己い勝へョ

「十四の時造りうつさせたる。老婆さんふ遣ひるいのサあ。サア
お寐とのゝふトのひて蒲団ふ羽打をとゝとゝび。辟人本性元ハ
だと蒲団ハ紙入より。金を出してちよと捨て「大きふ
ごちそうぎ
ぢた蒲ざつさサア一杯ぐ飲でゆらつーゝ供の男ふ投てゆとゝび。
二人ゝこゝを戴いて「お花ゆらお光さん。ゆの卒お特ゝ中ゝ
金蒲ふさんちゝ花ゆらトをとくゝみて出てゆく

郭花笠四編巻之上終